

パストラル・カウンセリングの

基礎的原理について

——ヒルトナーの所論を中心として——

高 橋 堯 慧

現代社会における一番の大きな問題は、人間性の疎外と云うことであろう。科学の進歩にともなう機械文明の発達に、いまや我々の精神生活は一つの危機をもちたられしていると云っても云い過ぎではなからう。と云うのは人間性がいや人間存在そのものが脅威にさらされ、そこに現代人の神経症的状况が生れてきているからである。この神経症的状况は今日の我々に大きな問題を投げかけ、かつ我々自身もこの問題に真剣に対処せねばならないところに来ている。社会学・心理学の分野ではこうした問題に徹底した研究を行い、それなりの解決の道を見出そうとしている。特に心理学の分野では、カウンセリングと云うヒューマニズムをその基盤とした救済の方法が研究され脚光をあびてきている。

カウンセリングとは、今日においては心理療法と同じような意味において用いられているし、又治療もそうした意味においてなされていよう。一般的にはそれでよいし充分な効果があげられていようが、私はここにカウンセリング

は単なる心理療法を越えた人間の実存にせまり、人間性の恢復と云う全人格的な治療の意味が含まれてこなければならぬと考えるのである。

こうした傾向は西洋において、特にアメリカで著しい発達をとげ、最近の日本において注目されてきたものであるが、私も宗教に携わる者はたまたま仏教の中に生きる者にとって、そうした問題を心理学の立場でばかりとらえるにとどまらず、宗教の中にもいや仏教の中にとらえてゆこうとする行き方はなかるうか、これは私の前からの関心であった。

と云うのは、カウンセリングには全人格的な治療の意味が含まれてこなければならぬとする前提から、どうしても心理療法の領域では解決の出来ない宗教の領域にも含まれてくる問題があると確信するからである。

仏教とカウンセリング、この結びつきは私の持つ一つの問題点であるが、余りにも問題が大きすぎるとし又簡単にはとりあげられないものと考えていた。

しかし、「釈迦牟尼が菩提樹下の成等正覚の後、四七日に至る三昧の期間を経、梵天の勧請によって鹿野苑で五比丘に対して説法を開始された事蹟こそは、仏陀が、大乘としての本願行・慈悲行として一切衆生の前に初めてまみえたカウンセリングの実践、すなわち如来した態であるとする。かくして五人の比丘が教化せられて、仏陀と教法と僧伽との三宝が成立し、仏陀によって伝道の宣言がなされる。その伝道において、能教化の人が教化せられる人に対する伝道の真なるあり方は、一人と一人との対決であり、そこに対機説法が成就されていった。」^①と云う考え方が出てくるにあたって、私はここにかんがりの可能性を見出したように思える。だがこれをあくまで学問的体系的に進めてゆくには、かなりの無理があり、冒険でもあると考えている。

そこで私はまずその足がかりとなり問題性を投げかけてくれるものとして、すでに神学的背景をもち、一応学問的体系づけがなされてきている西洋のバストラル・カウンセリングに注目してみたいのである。

現代の宗教をふりかえってみると、一般的に宗教の無用化が叫ばれたり、又宗教の本道からはずれてきたなどとよく云われるのだが、これは一体どうしたことであろうか。

確かに、その内面的体験をあらわす行為からはずれ、おうおうにして形式的・外面的な人間たましいの一時の「がれ」の場所のような観がしないでもない。

それは我々のその宗教の真の意義に対する認識がうすれてきているからであろうし、いいかえれば宗教における人間理解が十分におこなわれていないからであろう。実際に宗教を理解するには、簡単には限定出来ぬであろうし又種々な見方がある。しかし私はここにその一問題傾向として「人間理解」をとりあげ、そのよって立つ根源に現代の一般的人間の理解がなくては十分の成果は得られないとする考え方を中心にとりあげたいのである。即ちこう云う人間学的配慮をもって、宗教の救いの一問題点としてあらわれて来たのが、いわゆるバストラル・カウンセリングといわれるものであるからである。

バストラル・カウンセリングとは、具体的には教会に携わる教職者が、その教区の人々の様々な問題にあずかり必要な助けを与えることとされている。この運動はかなり最近に起ってきたもので、この運動や組織の創設者としてホイゼンをあげることが出来る。

宗教の現象に社会科学的研究方法がとられるようになると、人間と文化との相関性の中で個体の欲求充足の行為を、環境とか対人関係においてみようとする人間学的立場から、宗教の諸現象を研究してゆこうとする動きがあらわ

れ、特にアメリカにおいてこうした傾向は強くなった。なかでも人間関係主義をその基盤としてすすめてゆくサリバンを代表とする新フロイド主義と呼ばれる一派によって、その理論的基礎づけがなされてきた。

精神分析学はフロイドによって創始されたのであるが、フロイドは欲望（性的）がその自然の表現が拒否された時にコンプレックスと呼ぶある種の型に、又意識的自己から分裂してゆくようになり、それが不安の源となり心理療法的徴候のあらわれとなると考えた。そしてその支障の起源をむき出しにすることによって治療が行なわれ、真の満足せる解決は抑圧された傾向が社会的に受け入れられ、又構成的な形における表現をみつける時にみられるとするのである。更にフロイドの宗教に対する態度は、「宗教は人間の一般的強迫神経症である」とするもので、確かにパーソナリティの構造において宗教や良心の重要性の認識は認められるが、宗教的関心にとって目的々な又建設的なものを見るに至っていない。こうしてフロイドによって始められた精神分析学は、一九一二年頃に至ってユングなどによって批判されてくるのである。即ちユングはそのフロイドの基礎的人間衝動としての性概念を痛烈に批判したのである。

ユングはフロイドの過去に重要性をもつのに対して、現在と未来に対する意義を重んずる。そして神経症が価値ある結果を作り出すに意義があり、その治療のなかでは宗教的なものが非常に重要である。加療者は患者に宗教や人生観を伝えるのではなく、患者自らの内に人生の意義を発見させるのであるとする。

故にユングは文化的ないし哲学的意義を重視しているといえよう。更に一九二〇年代には又新しい偏向と発達がなされ、最近に至ってホルナイ・フロム・サリバンをグループとするいわゆる新フロイド主義の考え方が生れてきたのである。

サリバンは精神異常の問題を、セルフと不安の関係から初期の対人関係にかえて説明する。即ち彼は精神混乱の

建設的な局面の認識に加えて、社会的要素と精神病における社会的な含蓄への注意を与えている。しかし彼はそれらの経験における宗教的な含蓄にはさほど注意を払っていない。がしかしヒルトナーによると実際にやってみれば、フロイド主義の人間関係による精神医学や精神療法の考え方が一番よいと見ている。こうした理論的背景をもって、学問的体系づけを試みて行ったのがヒルトナーであろう。

教会の牧師は様々な問題の相談にあずかり必要な助けを与えるのが目的であるが、実際に持ってこられる悩みの多くは世上の悩みである。故に牧師はたまたま精神異常の領域で信者と対談することがある。ポイゼンはこうした精神異常の経験と宗教的経験との間に関連性を見つけ、又自身も精神病患者としての経験を経て、教職者も宗教の研究と共に精神医学の知識が必要であるとし、一九二五年四人の神学生をウーチエスターの国立病院に送ることによって、パストラル・カウンセリングの端としたのである。

人間はあらゆる場面で欲求阻止や葛藤にままわれ、適応不能におち入る経験をもつことがある。そうした心的機制は不安とか恐怖とかを生み主体に向って迫ってくる。こうした主体での不安や恐怖は蓄積されて固定化してくると、神経症や精神病の前段階的な状況を生み出して来る。この様な領域で臨床心理学や精神医学は、生活体と環境との機能的関係に立ってこれを分析し理解し、生活体の適応可能な心的態度を持するよう治療に関係せねばならないのである。この適応不能の状態において、よってくる不安と恐怖との根ざされた精神異常や精神障害を見る時、そこにその異常な不適当な適応にかゝわるシステムがある。この異常な不適当なシステムを正当な適当なシステムにおきかえることが治療につながるのである。神経症及び精神病的な前段階の状況にある者はこの異常なるシステムを固守している

のである。そこでその異常なる事、異常なる要因を主体に把握させることが出来れば、異常なるシステムから抜け出せるのではないかと云うのである。この治療的目的に当って媒介的存在として意義あらしめようとするのがカウンセリングである。

即ちカウンセリングがクライエントとの対談において感情的障害を中心とする、心理的に異常なる状態にある原因をクライエント自らの内に「セルフ・アンダースタANDING」（自己理解と解されよう）させ、充分に自己を認識させた上で自発的に積極的に処してゆく力をつけさせようとするものである。

先にパストラル・カウンセリングは、人間関係主義を主軸とした新フロイド主義の考え方を根底においていると述べたが、パストラル・カウンセリングが常に成立するためには、そこに相互的な人間関係が成立せねばならない。故にヒルトナーは「パスター」と「クライエント」との関係重視するのである。カウンセリングが盛んになった今日でも、パスターがクライエントを対象として考えたと解されることがあるし、しばしば実際にそう云うことが行なわれている場合もある。

即ちパスターが高いところにあつて、クライエントとの間に対等の人間関係が生まれず、パスターが常に優先している場合である。人間と云うものはあくまで主体的存在であつて対象とはなり得ないものである。もしパスターがクライエントを対象とするならば、そこにはもはやカウンセリングは不可能となつてしまうと考えられるからである。パスターとクライエントとの間には、常に人間としての真に相互的な人間関係が作り出されねばならないのである。カウンセリングが人間としての真の相互的關係においてはじめて成立すると云うことは、ヒルトナーの云う「ノン・ディレクティブ」であらねばならないと云うことを意味しているであらう。ヒルトナーの云うノン・ディレクティブ

とは、「非指示的」方法と解されようが、そこには来談者中心と云う考え方も含まれていようし、何にもましてバスターとクライエントとの人間関係の成立に多大な関心をよせていることがうかがわれよう。ヒルトナーによって示されたこのノン・ダイレクティブな方法による療法においては、治療者よりもクライエント自らの方に重点がおかれることは推察されたが、クライエントの内にある治癒への可能性をひき出す場を設定するのはバスターである。

バスターはいかなる場合にあってもノン・ダイレクティブな方法において、クライエントとの人間関係を作りながら、自発的にクライエント自身の内に治癒への可能性を生み出してゆかねばならない。そこでバスターはいかなる場合においても云ったが、果していかなる場合においてもノン・ダイレクティブでありうるか？ 又いかにしてノン・ダイレクティブを維持してゆくかきわめて重要な問題であろう。

ノン・ダイレクティブにしてクライエントに対処し、その領域でクライエントに理解させてゆくことは、バスターのとする根本的態度でありカウンセリング遂行の基本的原理である。ノン・ダイレクティブがバスターのとする根本的態度であれば、ノン・ダイレクティブであらねばならないと云うことにおいて当然バスターに「テクニク」が要請されよう。テクニクと云っても直接的な科学的なテクニクでなく、人間関係を実現させるためのテクニクである。先にもふれたようにカウンセリングを可能にするには常に真の人間関係が成立せねばならないのであるが、一般的に真の人間関係がいつも成立するとは限らない。そこでバスターとクライエントとの間に真の人間関係が作られるよう意識的になされねばならない。意識的にと云う点においてテクニクが必要となってくると云うのである。ヒルトナーはバスターとクライエントとの間に真の人間関係が成立するために、バスターのとする基本的態度として次の三つ^③をあげている。

1、パスターは一時的であるにせよ永久的であるにせよ、全ての病いは精神的な或は心理的な様相を持っている事に注意せねばならない。

2、罪を作り出す感情的墮落を、いつも道義心を持って眺めてゆくべきである。

3、一定の教区民ばかりでなく、全キリスト教地域において救われたいと願っている全ての人々にとって、善良なる救いの手をさしのべる福音伝導者であらねばならない。

以上のことから、私は真の人間関係を作り出すテクニクは神学的背景を持つ「愛」の精神としてとらえられるのではないかと考える。人間に対する「愛」に勇気づけられた人間の相互作用における相互性に、パストラル・カウンセリングの可能性があると云えよう。

キリスト教的「愛」がパストラル・カウンセリングの可能性を生み出すことにおいて、私が先にパストラル・カウンセリングは神学的背景をもつと云ったゆえんがあろう。

更にヒルトナーは、パスターの臨床的場面での基本的仮説を次の様にあげている。^④

- 1、カウンセリングは教区民が自らの内に、ある種の葛藤があると感じた時に始められる。
 - 2、カウンセリングは理解から始まるのであって、約束とかそう云うものから始まってはならない。
 - 3、カウンセリングは自分自身を救おうとするその人を救うことであり、人の為に何かをしてやることではない。
 - 4、カウンセリングは強制があつてはならない。
 - 5、カウンセリングにおいてはトリックを使つてはならない。
- 更に重要なことは、パスターは自分自身について充分な理解をしていなければならぬと云うのである。

これは臨床面でのノン・ディレクティブであらねばならぬための具体的な且つ基本的な仮説であるが、これを通して云えることはバスターとクライエントとの間の真の人間関係において、クライエント自身内に己の真の可能性をみつけ出し、クライエント自身変化をとげてゆくことである。

さてクライエント自身己の内に真の可能性を見つけ出すと云ったが、これはヒルトナーにおいては「セルフ・アンダースタンディング」の理論につながるものであろう。

「セルフ・アンダースタンディング」とは、自分自身を理解し現在の自分を受け入れると云うことである。その為にはまず人間の心理的生活史を検討することが大事であると云っている。即ち我々人間が生存する限りにおいて、その人間は社会的環境の中において成長してゆくことから社会的成長過程は注目されるべき問題であろう。次に心理療法的徴候に密接な関係のある無意識の感情を考察することが必要であろう。更にヒルトナーは知覚・緊張・性・人格的自由情緒・意識界等のパーソナリテイの形成にかゝる諸要素を把握してゆくことが、セルフを把握するHOWの問題に連なっていくと見ているようである。

しかしこれはセルフを把握する前段階約問題であって究極の目的ではない。カウンセリングの過程にあつてはクライエントの側のこうした問題は重要であり、セルフ認識の上においては要素的条件となりその治療にあたってはかなりの効果は得られよう。心理療法的段階においては、その原因をつきとめた時すでにカウンセリングは成功したと云えるし、その原因なるものを除去することによって治療は可能となるであろう。

がしかしこの段階において全ての問題が解決されえようか。私は解決と云うことの質の問題に注意をはらいたい。心理療法的段階ではその解決がその人間の心的機制において一時的ないやしであっても成功したと云えようし、又現

実問題として必要なことであろう。

だがパストラル・カウンセリングにおいてはその解決が永遠性と云う面でもとらえられてゆかねばならないと考える。即ち人間ライフの根底にある人間の本来性にふれてゆかねばならないのである。人間にとって最大の関心事である死の問題から数限りなき臨床的症狀が生れてくることは承知の如きである。一体我々はそれらの問題をどう扱うか、どう処理してゆけようか。心理療法において解決されようか。人間は生れると同時にすでに死と云う影を背負って立つ、そしてその目にみえぬ影が常に我々に向って迫ってくるのである。我々はその影におびえ不安に悩まされる。がしかし我々はどうすることも出来ない。即ち人間は投写的存在でありいくらもがこうがそれを切り抜けてゆくことは出来ないのである。

又人間は罪を背負って生まれてくる。即ち天地創造の当初アダムとイブの神に対する叛逆から人間の中には罪深き血が流れ、人は常にその罪を意識し神に対してゆるしを請わねばならないと云うのは、人間が生きている限り罪においてあり、人間である限りこの疎外された現状を独力で克服することは出来ないからである。こう云う問題に出合った場合心理療法的範囲においてどの程度解決されえようか。我々はその間に有限をこえた無の克服された姿を受け入れない限り、又妥協ではない真の「ゆるし」によって受け入れられない限りそこには解決の道は見出されないであろう。

パストラル・カウンセリングはこの有限性を越えた力を伝え、その力を受け入れる姿勢をとらせることに媒介的存在意義があると云えよう。

カウンセリングは心理学的次元での配慮であるが、パストラル・カウンセリングはあくまで宗教的配慮がなされね

ばならないと私は考える。一般にバストラル・カウンセリングと呼ばれるものの中に、おうおうにして心理療法的なカウンセリングにおわっている場合が多い。私がここで宗教的配慮を強調するのは何故であろうか。宗教的配慮とは精神異常や神経症などの疾患を個体において局部的に生物学的に見るのではなく、それを全体としての人格的疾患としてとらえそれぞれの症状や徴候の除去にのみおかれるのではなく、全体としての人格的な価値の実現を考えようとするのである。ここに人間存在の存在論を背景にして生まれてくるゆえんがある。

先にもふれたように人間が限界状況にある時、その人間は人間の存在に具わる無の頼りなさに当面して、それに引きずりまわされ自失した状態が氣狂いとなるか、ここをその通りに即ち無のとおりに頼りなさのとおりに身にひきうけて、自己を決め承知して態度をこちらからとってゆくかの二通りになる。後者の道こそまさにそこを越える道である。

不きまりなところを不きまりなとりに処し、足りなさをそのとりに生きるところに宗教の人間存在の構造にそってその存在理由をもつ所以^⑤がある。

これこそヒルトナーのセルフ・アンダースタンディングの理論の究極の問題として感ぜられるのである。

セルフとはその人間存在の存在論的構造であり、アンダースタンディングとは理解即ちそこを越えると云うことである。人間がその越えた時点ではじめて新しい生き方新しい人生観を持つのであり、それこそバストラル・カウンセリングの究極の目的であろう。そして我々がバストラル・カウンセリングを媒介としてそこをのり越える時、その態度はまさに宗教的と云えるのではあるまいか。

バストラル・カウンセリングが宗教的配慮の下になされると云う見方に立った時、個人としてのパスターはどうあ

るべきかが問題となろう。心理学的次元でのカウンセリングが、カウンセラーとクライエントとの間の人間関係が成立しているとは云え、尚カウンセラーの在り方性格によって左右されがちであるのに対し、パストラル・カウンセリングはそれを遂行する方がパスターの個別的な存在を超越するものであるから、パスター自身はそれ程問題ではないのである。故にパスターは秀れた希にみる人格者でなくてもよいであろう。教会に携さわる者であれば誰でもがカウンセリングを遂行することが出来ようし又資格がある。ポイゼンが精神医学の知識を持っていなければならぬとして、精神病院に神学生を送り込んだとは決して矛盾はしていない。と云うのは教会に持ってこられる問題は殆どが世上の悩みであり、パスターはいちいちこれに対処してゆかねばならず必要なことであるからである。そして究極において、宗教的な解決が最も秀れた答として残るよう設定されているからであろう。

註 1、藤田清著 仏教カウンセリング 誠信書房

2、ポイゼンの著 *The exploitation of the innerworld, 1936* の中で「私はどろ沼の時代を昆虫や鳥の時代を生き月や太陽を訪問した。宇宙全てを徘徊した。意識は全ての未知の世界におりたち恐ろしい空想の世界に入ってしまった。」と述べ、これらの経験を恢復後に分析したところ確かに病理学的局面をもってはいるが、昔の予言者の考えに似ていることを知った。そして患者達の悩みと宗教の回心時における心の悩みとが類似していることを知りパストラル・カウンセリングの新しい局面を切りひらいて行ったことがうかがわれる。

3、Seward Hiltner. *Pastoral Counselind, 1944.*

4、右に同じ

5、石津照塵 宗教的人間 培風館 九頁以下参照